木原孝一著

人間の詩学

詩の発見と創造

飯塚書店

著者　木原孝一　1922年東京生。墨田工業高校卒。
「VOU」「荒 地」同人。『詩学』『現代詩手帖』編集。
東京綜合写真専門学校講師，他。
詩集『星の肖像』『木原孝一詩集』『ある時ある場所』他。
編著『100人の詩人』『日本愛唱詩集』他。
放送詩劇『一番高い場所』その他により芸術祭文部大臣賞，
奨励賞，イタリア賞グランプリ受賞。
日本現代詩人会会員。

人間の詩学　詩の発見と創造

1974年10月1日発行

著　者　木原孝一
発行者　飯塚広
印刷所　赤城印刷株式会社

東京都豊島区駒込6～6～23　飯塚書店
TEL (918) 2090　振替東京13014

1392—13001—0300

木原孝一著

人間の詩学

詩の発見と創造

飯塚書店

読者への手紙

私がこの本を書くときに意図したことが三つある。まず第一に、いままでの詩の入門書に見られるような、詩とはなにか、詩のつくりかた、という枠組にとらわれず、もっと広い立場から、人間にとっての詩、人間と詩とのかかわりあいのうえにおける詩の意味というものの探求を中心に置いたこと。第二に、一篇の詩そのものを、実際に即して、状況の眼と、永遠の眼と、人間の眼と、この三つの視点からとらえようとしたこと。第三に、詩を考えることが、そのまま人間の存在を考えることとのダブルイメージにほかならない、という立場に立って筆をすすめたこと。この三つの意図がまだ充分に果されたとは云えないが、従来の入門書とは異った次元に焦点をあわせた努力は汲んでいただけることと思う。

なお、この「人間の詩学」の続篇として、世界史的観点に立った詩の鑑賞と作品ノートを書いている。これもあわせてお読みいただきたい。

一九七四年九月一日

木原孝一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

人間の詩学

詩の発見と創造

目次

読者への手紙

第一章　詩の発見

1　イメージの発見　10
2　芸術の発見　20
3　ことばと文字の発見　30
4　詩の発見　39
5　民衆の魂　53

第二章　一篇の詩ができるまで
　　詩を書こうとするときに

1　感受性の在りか　72
2　感動の発見　84
3　想像力の発展　96

4 主題の発見 110
5 モチーフはどこにでもある 118

第三章 一篇の詩ができるまで
詩の方法
1 詩と劇＝詩の構成 130
2 比喩の世界 140
3 象徴の世界 151
4 フォルムの構造 164
5 スタイル 176

第四章 詩をどう読むか
詩をどう書くか
1 詩をどう読むか 190
2 詩をどう書くか 212
3 名作の読みかた 225
4 難解な詩の読みかた 234

第一章　詩の発見

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

1　イメージの発見

フランスの西南部を流れるドルドーニュ川の支流ヴェゼール川のほとりに、有名なラスコーの洞窟がある。これは一九四〇年、四人の少年によって偶然に発見されたものだが、その暗闇のなかには驚くべき人間の歴史が眠っていた。そこにあるのは黒や、赤や、褐色や、黄色の原始的な顔料で描かれた壮麗な動物画であった。発見した少年たちが懐中電灯で照らしてみると、その動物たちはまるで生きているように息づき、動いているかのように見えたという。描かれている動物は、牛、馬、鹿などが多かったが、洞窟の奥深いところに、一枚の不思議な壁画があった。ほかの壁画は、野牛とか、馬とか、鹿とかが単独に描かれていて、それぞれの画像と画像のあいだにはほとんど関係がないが、これは少し違う。

まず黒い線で描かれた左向きの野牛が見える。その野牛の尻から腹にかけて一本の槍が突き刺さり、腹からは内臓が垂れさがっている。しかもその野牛は首をうしろに振り向けて、尾を逆立てている。おそらく瀕死の痛みに耐えているのであろう。

その野牛の頭の下に、頭が小さくて鳥の嘴を持った人像が両手を拡げるようにして倒れている。その細長い線描きの人像の両足の付根のところには明らかに男根が描かれている。これは男性であ

ることを示したものだ。そのすぐ足もとに、小さな鈎つきの棒、命中率を高めるために槍をあてがう投槍器と思われるものがある。そして左手の下には尖端に鳥のいる棒が描かれている。ほかの単独の壁画と違って、この壁画には明らかにひとつの構図を持ったドラマが描かれている。

この壁画の解釈はいまのところ二つに分かれている。

ひとつは、先史美術研究の第一人者、フランスのブルイユの解釈で、彼によれば、この鳥の頭を持った人間は狩猟の最中、野牛に槍を打ち込んだが、急所が外れたため、怒り狂った野牛の反撃を招き、逆に殺されたのだという。彼はこれを「史前の悲劇」と呼んだ。

別のひとつは、ドイツの民族学者キルヒナーの解釈で、この鳥の頭を持った人間は神がかり状態の呪術師であり、瀕死の野牛は犠牲の獣だという。鳥のついた棒は犠牲獣を天国に導く補助の精霊で、呪術師自身が精霊を分ち持つために鳥の仮装をしなければならない。これに似た構図は、シベリヤのヤクート族の絵画にもあり、呪術師がよく鳥の冠りや、鳥の仮面をかぶることは私たちもよく知っている。

この二つの解釈のうち、どちらが正しいのか、にわかに断定することはできないが、いずれにしても、鎮魂の絵として描かれたか、呪術の絵として描かれたかのどちらかでなければならない。

原始時代、オーリニヤック期（紀元前三万～二万五千年）のある日、長い暴風雨に閉じこめられた一群の原始人たちが、狩猟に行って獲物をとることができず、薄暗い洞穴のなかにうずくまっているとき、それら原始人たちの最大の願望は、飢えを満たすための野牛の肉であった。その内的願望はやがて内的欲求となり、そこにひとつの夢あるいは幻想をつくる。それがイメージの本質であ

る。現にラスコーの洞窟には、一〇〇以上の動物、馬や牛や鹿が描かれているが、これこそ原始人の内的欲求即ちイメージであった。

「史前の悲劇」と呼ばれる壁画は、それまで飢えという内的欲求であったものから更に進んで、死んだ勇者に対する鎮魂のイメージ、あるいは欲望をかなえてくれる呪力のイメージとなったものと考えられる。

人類は誕生以来数十万年の歴史を持つといわれているが、オーリニヤック期には簡単なことばはあったとしてもまだ文字はなかった。

そこでイメージを表現するにはこうした洞窟壁画による以外には方法がなかった。壁画は内的欲求のイメージ、鎮魂のイメージ、呪力のイメージの表現であると同時に、原始人類の感性の表現でもあったのである。

もとめること多い熱狂を　かつては抱いていた長いからだ
いま傷ついた禽獣に垂直に

おお　殺されて　はらわたもない！
かつてはすべてであり　和解して　いま死のうとしている　彼女によって殺されたもの
彼　奈落のおどり手　精神　いつもうまれ出ようとしていたもの

鳥　そして残酷にもすくわれた　さまざまな魔法の背徳の美学
（死んだ人鳥と瀕死の野牛。―ルネ・シャール）

これは「史前の悲劇」を主題としたフランスの現代詩人ルネ・シャールの詩だが、原始人のイメージ（内的欲求）をみごとに再現している。

おなじオーリニヤック期の出土品に、「ビレンドルフのビーナス」と呼ばれる女性の裸像がある。これはオーストリヤで発見された石灰石の高さ十一センチほどの像だが、頭の半分以上は縮れた髪の毛のようなものに覆われ、顔も、眼も、鼻も、口もない。また、両腕も明確にはあらわされていない。そしてこの女性はみごとなグラマーで、乳房、腹部、臀部がいちじるしく張り出し、三角形の女性性器と、太い腿と、短い脚を持っている。これとおなじような原始のビーナス像は、大西洋岸から、フランス、イタリア、中部ヨーロッパ、東部ヨーロッパを経てシベリアに至るまでの間に約六〇点発見されているが、ほとんどは顔など問題にせず、乳房、骨盤、女性性器に関心の重点がおかれている。

原始時代、セックスは現代のような享楽の対象ではなかった。こどもが一人生まれるということは部族が一人ふえるということであり、部族の生産力が増すということであり、部族の勢力が強くなるということであった。そしてまた、子を産むということは女性のみに果されることであり、その子は女性性器からのみ出産される。原始時代にあっては、出産ということは人間にとって最大の

神秘であった。獣の数がふえる、すなわち食糧がふえるということも、時代がくだって農耕がはじまって稔りがよくなるということも、この出産の神秘につながった。この乳房と骨盤と性器を表現した原始のビーナスこそ、豊饒の女神の原型にほかならない。

出産こそは新しい生命の誕生であり、出産の神秘こそは呪力によってのみおこる出来事である。この原始のビーナスの示すものこそ、生命力のイメージであり、呪力のイメージである。

このように約三万年前に、すでに芸術の永遠の主題である、死のイメージ、生のイメージは創造されていた。そしてその神秘の底にあったのが呪力のイメージだったのである。

日本で発見された原始のビーナスにあたるものは縄文式文化の時代(約九〇〇〇年前)の土偶で、顔、眼、鼻、口に加えて、乳房と性器があるところから女性であることはまちがいない。しかも、この土偶はほとんど故意に破損されていて、完全なものは極めて稀れである。これは女性が出産のとき、あるいは病気のとき、そこにとり憑いた悪魔を土偶に転嫁させ、それを地中に埋めたためであると考えられている。まさに悪魔祓いの芸術であったわけである。原始の悪魔祓いは呪術によるのほかはなかった。ある女性にとり憑いた悪魔は、グロテスクな容貌をした土偶のイメージを持っていた。それを割ったり、砕いたりして、その呪力によって出産の無事、病気の回復を願ったのである。原始ヨーロッパのビーナスのように、原始日本の土偶にも、強烈な呪力のイメージがあった。

すべての状況は隷属であり、幾百の隷属である。それらの隷属状況から完全な満足

がもたらされるとしたら、あるいはまた、いかに活動的な人間にせよ、ひとりの人間が現実の中でそれらのすべてと斗って効果をあげることができるとしたら、それは未曽有のことである。なすべきことは悪魔祓いだ。悪魔祓い、すなわち力のひとつによる反撃、鉄槌の攻撃による反撃は、囚われ人の真実の詩だ。苦悩と偏執観念のその場所に、人がかかる激昂とかかる激烈さとを、言語の乱打に結びつけて導入すること、そのことによって苦痛は徐々に消えて行き、軽快な魔術的球体がその苦痛にとって代る——それはすばらしい状態だ。

これは現代フランスの詩人、アンリ・ミショオの詩集『試煉——悪魔祓い』につけられた序文の一部だが、このなかの「言語」をイメージに変え、魔術を呪術に変えて考えてみれば、呪力のイメージは現代においてもまだおおきなはたらきを持っていることがわかる。

イメージ。Image 1、像、肖像、彫像、画像、影像、偶像。2、よく似た人〔物〕。3、『光』（鏡または網膜上の）映像。4、象徴、権化、典型。5、『心理』心像、表象、概念。6、『修辞』比喩的表現、直喩、隠喩。

辞書を引くとイメージにはこのような意味が出てくる。だがこれだけではイメージの真の意味をつかみとることはできない。

飢えている原始人が野牛の肉が喰べたい、という内的欲求を感じる。これは本能的欲望である。その内的欲求が心のなかに形となってあらわれ、一頭の野牛の姿を心のなかに描くとき、そこにひ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c